令和５年度　石川県立盲学校　自己評価計画　最終評価

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析および今後の取り組み
1 授業実践力の向上	主体的･対話的で深い学びの視点から教科指導の充実を図る。	全学部 教務課	【努力指標】 教員間で授業を参観し合い、授業改善の視点を持つことに取り組む。	自分の授業を２回以上参観してもらい、授業改善に活かした教員の割合が Ａ　８０％以上　　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　　Ｄ　６０％未満	Ａ (82%)	自分の授業を２回以上参観してもらった教員は82%であった。参観してもらった全ての教員が、参観者からの意見を授業改善に活かすことができたと回答し、参観者から授業改善の視点を得ていた。今後、他校の授業参観を検討していきたい。
2 専門性の向上とセンター的機能の充実	教職員一人一人が、視覚障害教育における自己の専門性の向上を目指し、校内での研修を受けるとともに、外部の研修に参加する。	全学部	【努力指標】 各自が視覚障害教育に関する校内研修のほか、外部研修への参加に取り組む。	年間をとおして、外部研修（オンライン等を含む）を２回以上受講した教員の割合が Ａ　８０％以上　　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　　Ｄ　６０％未満	Ｂ (77%)	77%の教員が、外部研修を２回以上受講した。23%も１回は受講している。理療科の研修会など、県内で開催されないものにも参加でき、専門性の維持向上の一助となっている。専門性の向上は全国の盲学校の課題となっており、次年度も継続する。
	外部支援担当者会で、専門相談員派遣や教育相談のケースを事例として検討会をもち、相談担当者の専門性の向上及び相談・支援の充実を図る。	支援課	【成果指標】 事例検討会や自主研修会を実施し、多様なケースの検討を行うことにより相談･支援に関する専門性が向上する。	事例検討会を通して、専門性が向上したと回答した外部支援担当教員の割合が Ａ　８０％以上　　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　　Ｄ　６０％未満	Ａ (100%)	外部支援担当者全員が、外部専門家を講師とした研修により有用な知識を得ることができ、相談で活用できると返答した。実際の事例をもとにケース検討を行ったことで、具体的な事柄について協議し、助言を受けたためと考えられる。研修を継続したい。
3 キャリア教育の推進	学部集会や交流学習等(オンライン交流を含む）で、児童同士が話し合う場を設け、コミュニケーション力の育成に取り組む。	小学部	【努力目標】 他の児童と話し合う場を設定し、お互いの考えを伝え合う機会をつくる。	児童が考えを伝え合う場面がある交流学習（オンライン交流を含む）を年間６回以上実施した児童の人数が Ａ　３人　　Ｂ　２人 Ｃ　１人　　Ｄ　０人	Ａ （３人）	学部集会で質疑応答や各児童の考えや思いを話し合う場を設定した。また、交流学習では、できるだけ児童同士がお互いの意見を伝え合ったり、話し合ったりする活動を設定した。全ての児童が、順序を考えて話す、自分の思いを言えるなど、コミュニケーション力の向上が見られた。
	生徒一人一人が持つコミュニケーションに関する課題を理療科全体で共有し、授業や学校生活を通してその課題改善に取り組む。	理療科	【満足度指標】一人一人の課題を掲げたチェックリストを用いて、生徒が自らの課題を改善できたと感じる。	生徒個々の目標に対して、生徒自身が授業等を通して課題を改善できたと感じる項目の割合が Ａ　８０％以上　　Ｂ　６０％以上 Ｃ　４０％以上　　Ｄ　４０％未満	Ａ (90%)	授業で患者との会話をフィードバックしたり、説明する場面を設定したりして指導した結果、生徒は年度始めに揚げた自らの課題について、10項目中９項の課題を改善できたと感じている。今後も臨床につながるよう意識付けを行い、更なるコミュニケーション力の向上を目指す。
	自分の将来像のイメージが持てるような、進路に関する授業を行っていく中で、働く力の育成を図る。	進路課 中学部 普通科	【満足度指標】 進路について、授業や進路行事を通して、生徒が将来像をイメージできたと感じる。	進路に関する授業や行事が自分の将来像を考える上で、参考になったと感じる生徒の割合が Ａ　８０％以上　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　Ｄ　６０％未満	Ａ (82%)	「参考になった」と回答した生徒は82%であった。（無回答2名）進路行事では、複数の卒業生を招き、希望する進路にあわせて話を聞くことで、自分の将来像をより身近にイメージすることができた。今後も、より充実した取り組みを継続したい。
				進路に関する授業や行事を通して、生徒が自分の将来像をイメージできるようになったと感じる保護者の割合が Ａ　８０％以上　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　Ｄ　６０％未満	Ａ (80%)	「感じた」と回答した保護者は80%であった。将来のことについて本を読んだり親子で話をしたりすることが増えてきたという意見が複数あった。今後は行事だけではなく、進路に関する授業の内容や生徒の様子なども発信していきたい。
	自らの生活上の課題に気づき、適切に目標を定め、必要な支援を受けながら解決を目指す課題解決能力の育成を目指す。	寄宿舎	【満足度指標】 生徒が、自らの課題に気づき、実践を通して解決する力が身についたと感じる。	自分の課題から目標を設定し、解決のために継続して取り組むことができたと答えた舎生の人数が Ａ　４人　　Ｂ　３人 Ｃ　２人　　Ｄ　１人以下	Ａ （４人）	全員が目標に向けて継続して取り組むことができたと回答した。指導員が舎生と話し合って目標を設定し、指導員間で共通理解して日頃から声をかけながら取り組んだことで、舎生自身が目標を意識して、取り組みを継続することができた。
				課題解決にむけて目標を設定して取り組んだ結果、変容が見られたとする保護者の人数が Ａ　３人　　Ｂ　２人 Ｃ　１人　　Ｄ　０人	Ａ （３人）	全ての保護者が舎生の変容が見られたと回答した。日々の言動から分かるとの回答があり、舎生が日頃から目標を意識し、家庭でも課題の解決に向けて取り組んでいることがうかがえる。今後も保護者と連携し生活面の自立につなげたい。
4 校務分掌等の業務改善	各課が、マニュアルをもとに、業務の効率化や平準化を目指して業務を遂行する。	全学部	【成果指標】 各課のマニュアルやスケジュールをもとに、効率化や平準化を意識して業務を行う。	各課のマニュアルやスケジュールをもとに業務の効率化や平準化を意識して業務を行った教員の割合が、 Ａ　８０％以上　　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　　Ｄ　６０％未満	Ａ (83%)	83%が効率化を意識できたと回答した。マニュアルにより業務を見通すことができ効率化につながったが、児童生徒数の減少で行事が途切れることや実態に合わせた計画が必要なため、マニュアル通りに行かないこともあった。見直しも併せて行っていく。